（様式－１）

民間によるインフラの観光資源化　～首都圏外郭放水路での取組～

江戸川河川事務所　調査課　秋山　賢

１．インフラツーリズムへの期待

インフラ施設をツアーや見学会を通して見てもらうことで、事業の必要性や維持管理の理解促進を図り、インフラを地域固有の財産、観光資源として活用し、地域活性化について繋げようとするインフラツーリズムが日本全国で活発化している。首都圏外郭放水路の見学会では以前から特に地下神殿とも称される「調圧水槽」が人気となっており、内閣府が平成２８年３月にとりまとめた「明日の日本を支える観光ビジョン」では、赤坂や京都の迎賓館と並んで首都圏外郭放水路が、より大胆な公開や開放を求められる等、期待が高まったことから、見学会の受け入れ拡大を平成２８年度から実施することとなった。（写真－１）

【写真－１】調圧水槽

２．国による見学者の受け入れ拡大策

平成２８年６月より見学会拡大の取り組みとして、平日しか開催していなかった見学会を土曜日に開催。平成２８年度は月１回のみの開催であったが、開始から５分で予約が埋まってしまう盛況ぶりのため、平成２９年度からは月に２回の実施に拡大した。その他の拡大策としては１日３回実施していた見学会の１回を定員２５名から５０名へ拡大、定員拡大に伴う駐車スペースの増設や屋外トイレの整備、ドローン映像の制作等、受け入れのためのインフラ整備を実施した。（写真－２）

【写真－２】国による見学者拡大の実施内容

３．新しい見学会運営の模索

平成２８年度より実施してきた、国による受け入れ拡大策により見学者は増加したが、ニーズの高い休日見学会の開催や、実施回数の更なる拡大は、経費や職員負担を考えると国単体の運営は限界になっていた。限界を可能とし持続するために必要なことや見学施設の価値を高め、見学者のニーズを反映するためには、従来とは異なる全く新しい見学会運営方法を構築する必要があり、様々なことを模索する過程において、各種分野に精通した

有識者の方を招いて意見や提言をいただくため『首都圏外郭放水路利活用懇談会』（以下「懇談会」という）を開催することとした。

４．懇談会の提言による方向性の確立

平成２９年９月に開催した懇談会では、集まった観光や地域振興、メディア、インバウンド、治水に精通する有識者の方から様々な意見やアイデアが提言された。提言には施設の運営を民間事業者に開放。国、市、地元の関係団体で構成された協議会を設置することが示され、現在進めている取り組みの方向性が確立された。（写真－３）

【写真－３】懇談会

５．民営化に向けてのステップ

見学会の民営化を進めていく過程において必要であった取り組みを紹介する。

５．１　首都圏外郭放水路利活用協議会の設置

懇談会の提言を踏まえ、『首都圏外郭放水路利活用協議会』（以下「協議会」という）を設置し、民間活力（アイディアやノウハウなど）による利活用を進めるため民間事業者の公募や選定の他、ルール作りを行っている。これまで平成３０年２月の設置から見学会の方向性を決める節目に計６回開催している。（写真－４）

【写真－４】利活用協議会

５．２　都市・地域再生等利用区域の指定

民間活力による利活用を推進するため、河川空間のオープン化（都市・地域再生等利用区域）の制度を活用した。これは、民間事業者が営利活動を行うことを可能とする区域指定をするもので、市の要望を受け、関東地方整備局では、営業を行う敷地を「都市・地域再生等利用区域」に指定した。なお、関東地方整備局の管理する河川において、都市・地域再生等利用区域の指定は、初の事例でもある。（写真－５）

【写真－５】庄和排水機場（龍Ｑ館）

５．３　東武トップツアーズ（株）と連携協定を締結

民間開放による施設見学会等を実施するための基礎データ収集を目的とした社会実験を実施するため、協議会が公募により選定した東武トップツアーズ（株）と平成３０年４月に連携協定を締結した。民間事業者との協定により運営体制が整い、８月の社会実験に向けた具体的な準備を協議会と民間事業者の二人三脚で加速度的に進めていった。

７．　国の防災施設としては日本初！「民間運営」による社会実験見学会を開始

平成３０年８月から、協議会主催、連携事業者である東武トップツアーズ（株）企画運営による社会実験見学会（第１弾）を実施した。土日祝日の開催や、定員、回数を大幅に増やすことで、見学機会を増やし、日本が世界に誇る土木技術を結集して建設された世界最大級の地下放水路を「防災地下神殿」として全世界に発信し、民間活力の活用により､観光振興や地域活性化を促進する新しい取り組みである。（写真－６）

【写真－６】見学会風景

７．２　新しい見学会の新サービス

社会実験見学会では、土日祝日の開放や定員、回数の増加といった見学機会の増加や、ＡＲ（拡張現実）や多言語アプリといった新コンテンツの制作。参加者に「地下神殿カード」の配布等、「８つの進化」と題した様々な取り組みを実施し、見学内容の充実やサービス向上を図った。料金は６５０円（８月のみ５００円）で実施したが、質・内容とも好評であり、高い参加率を維持している。（写真－７）

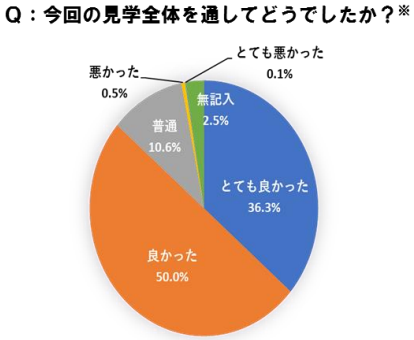
【写真－７】ＡＲアプリ

７．３　実施結果

８月から１２月にかけて実施した社会実験（第１弾）では、開始から５ヶ月で、対前年の同期間と比べての３．７倍となる３５，４０１人の方が参加し、アンケート結果でも９割近くから好意的な評価を頂いた。（図－１）

また、バスツアーの解禁や団体見学の拡大により、首都圏外郭放水路とセットになった春日部や周辺の地域を巡るツアーが形成され、地域振興に成果をあげた。

地域活性化でも効果を発揮し、「道の駅庄和」や春日部の農園では見学者への割引サービスの提供や、施設内にＰＲパンフレットやマップ等を配架し、市内回遊性を向上させる取り組みを実施し、見学会参加者に地域の魅力をＰＲすることができた。



【図－１】アンケート結果

８．“深化”する社会実験（第２弾）

平成３１年３月２３日から新たに始まった、社会実験見学会（第２弾）は、第１弾の検証結果を踏まえ、持続可能な料金設定や料金や見学時間の異なる３コースを設定、施設を改修し量より質に重きをおいた“深化”した見学会である。半径３０ｍ深さ７０ｍの第一立坑にはキャットウォークと呼ばれる点検用の通路があるが、安全管理上、キャットウォ

ークの開放はハードルが高いため実施していなかった。社会実験見学会（第１弾）の検証結果では、キャットウォークの見学希望が多かったことから、要望に応えるためにも施設を改修し、安全対策（安全帯の装着）を講じることで社会実験見学会（第２弾）よりキャットウォーク歩行を可能とした。また、機械マニア垂涎の日本最大出力を誇るガスタービンエンジンを間近で見せられるようポンプ室にも安全対策（スイッチ類の誤操作防止策）を講じることで公開可能となり、見学会の魅力を一層“深化”させている。（写真－８）

【写真－８】施設改修を行い公開可能となった施設

８．２　新コースの設定と持続可能な料金体系

第１弾では、見学コースは１コースのみだったが、魅力をより「深く」体感できるよう、以下のとおり、魅力・見学時間の異なる全３コースを設定し、各コースの料金体系の見直しを行った。

① 迫力満点！立坑体験コース　　（１１０分／回：３，０００円）
② 深部を探る！ポンプ堪能コース　（１００分／回：２，５００円）
③ 気軽に参加できる！地下神殿コース（５５分／回：１，０００円）

９．実施にあたって苦慮した点

国・市・民間事業者の３者は、社会実験を成功させるため、力を尽くしているが、立場の違いから３者の第１目標は異なる。例えば国はインフラツーリズムの拡大を第１に考えるが、市は地域活性化や観光振興が１番の関心事である。また、事業者は収益が最も優先すべき事柄であるのは言うまでも無い。この３者の各目標が洩れなく達成され、社会実験が“３方良し”となるよう意見調整する事が必要である。

また、従来は、請負を使って見学会の運営補助を実施していたが、社会実験から民間運営となったため、マニュアル整備やシナリオ作成で事業者との調整に時間を要した。（いまでも毎週、国、市、事業者の３者が集まり、進捗確認や意見、懸案を話し合って運営している）。

１０．最後に

本取組みは、開始から間もない取り組みであり、深化を重ねないと継続的に見学者を呼び込むことはできない。“３方良し”を目指し、それが長期的に持続可能なものとなるよう引き続き取り組んでいくためには利用者の「声」、地元との連携が不可欠であることを念頭に今後とも進めていく所存である。